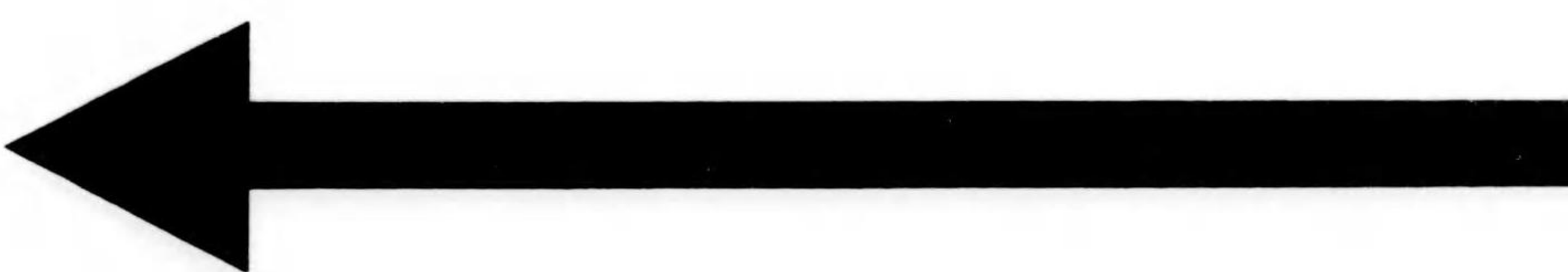
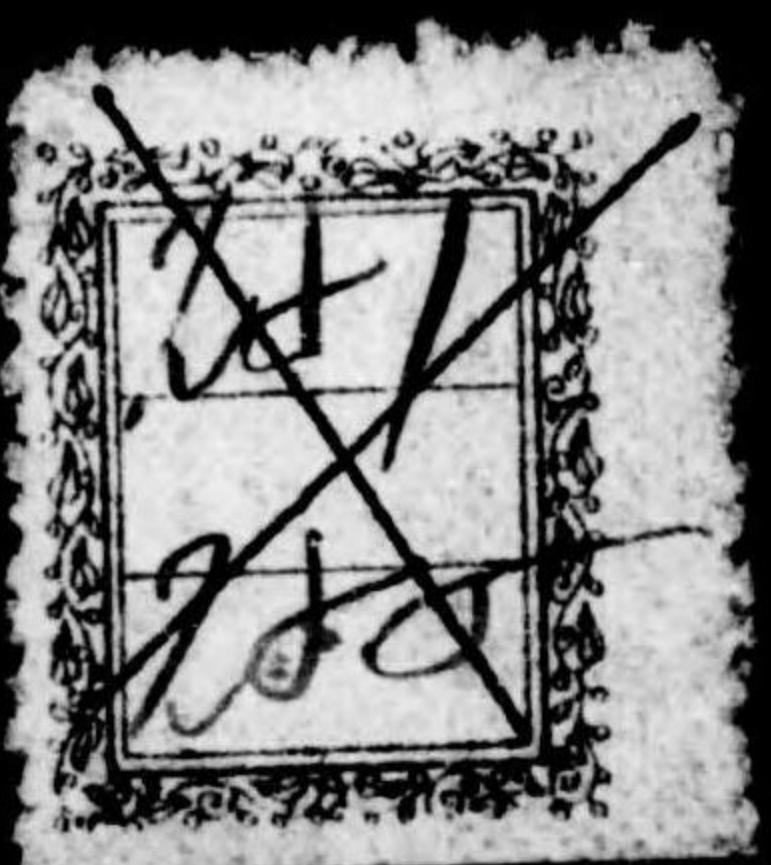


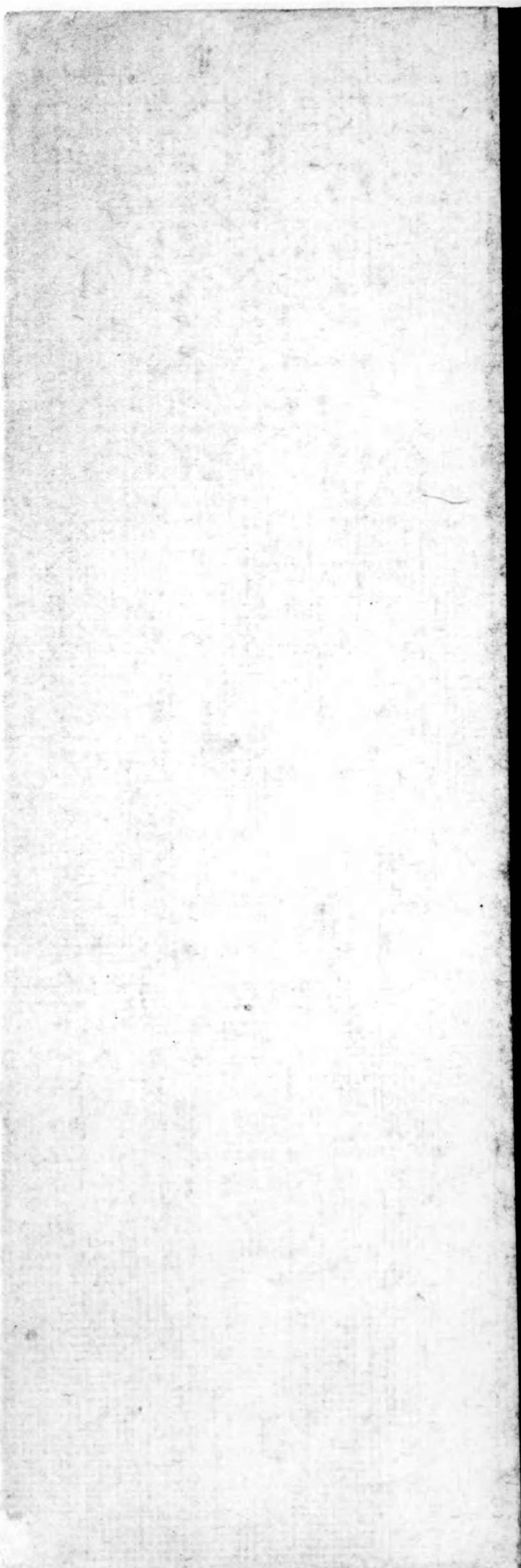
始

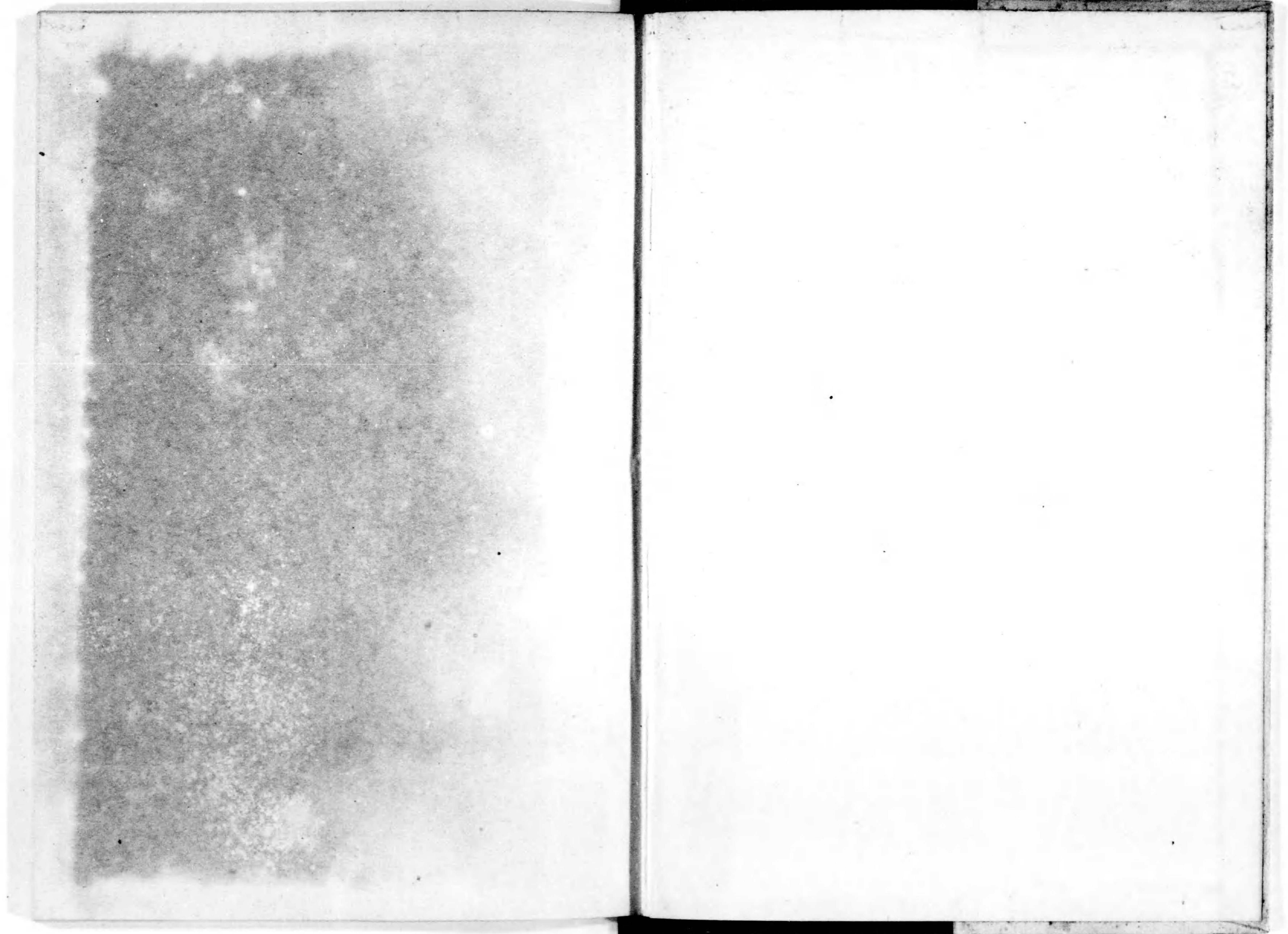


0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ¹⁶/₇₀ 1 2 3 4 5

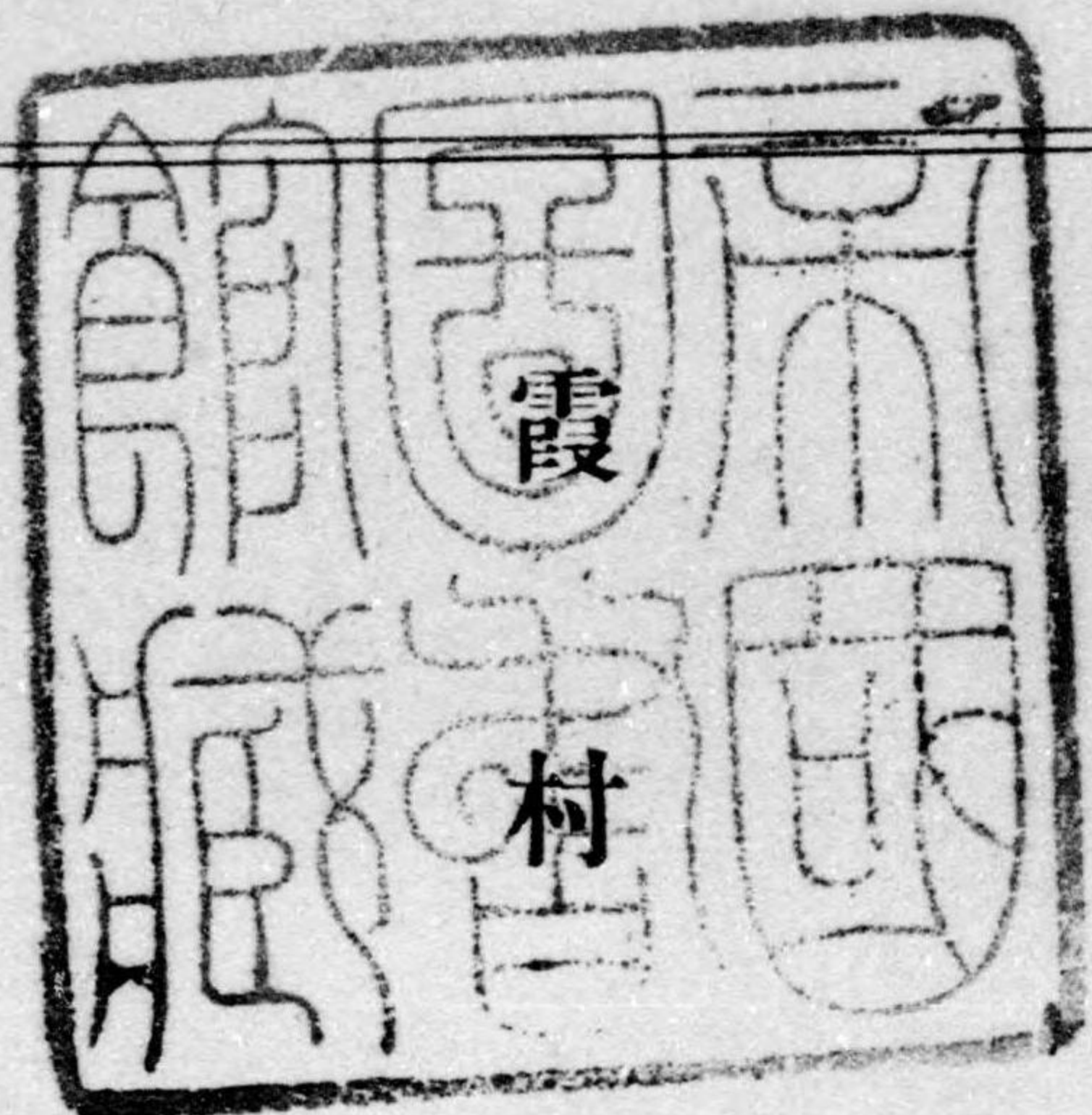


特





特100
38



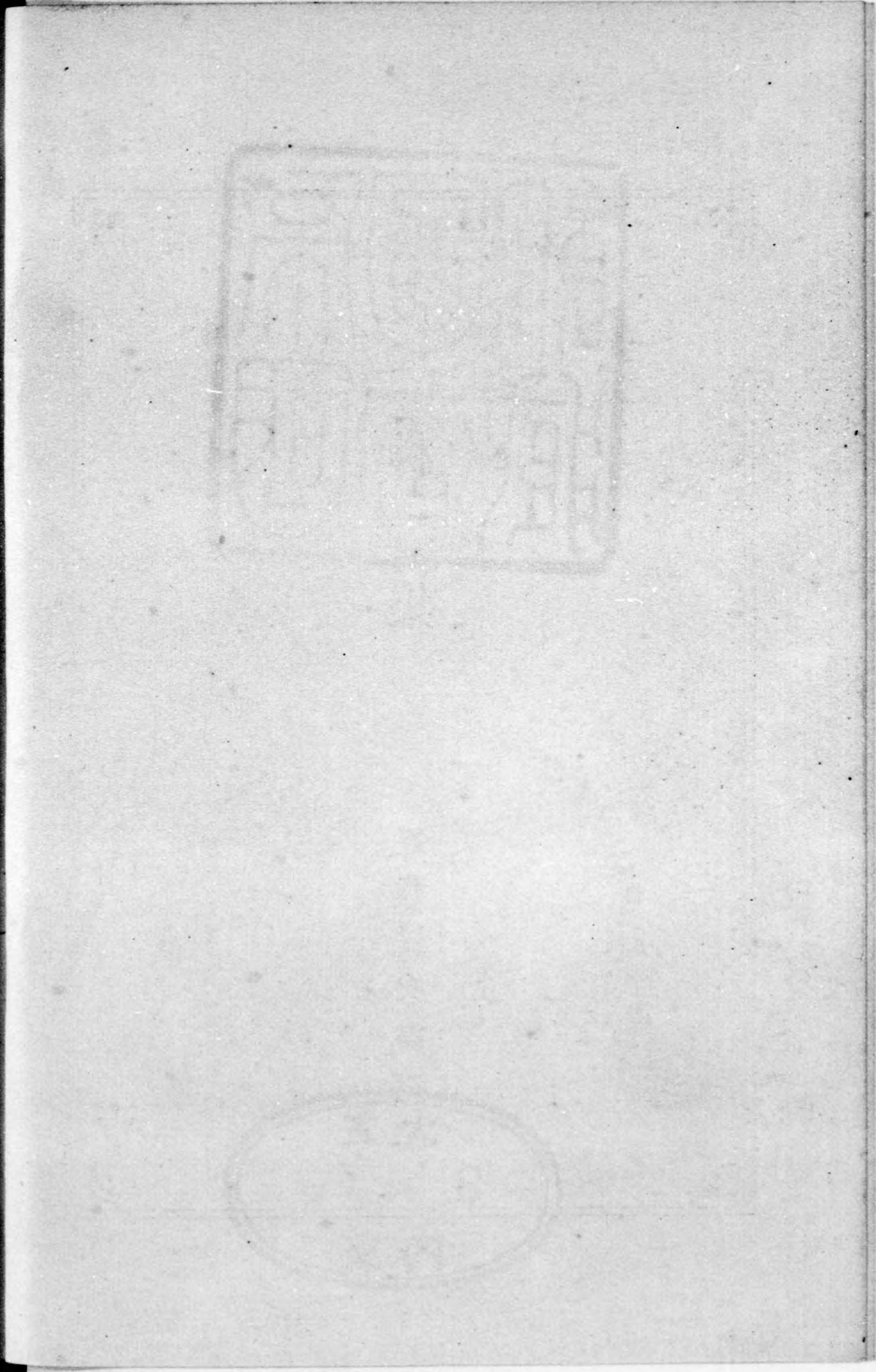
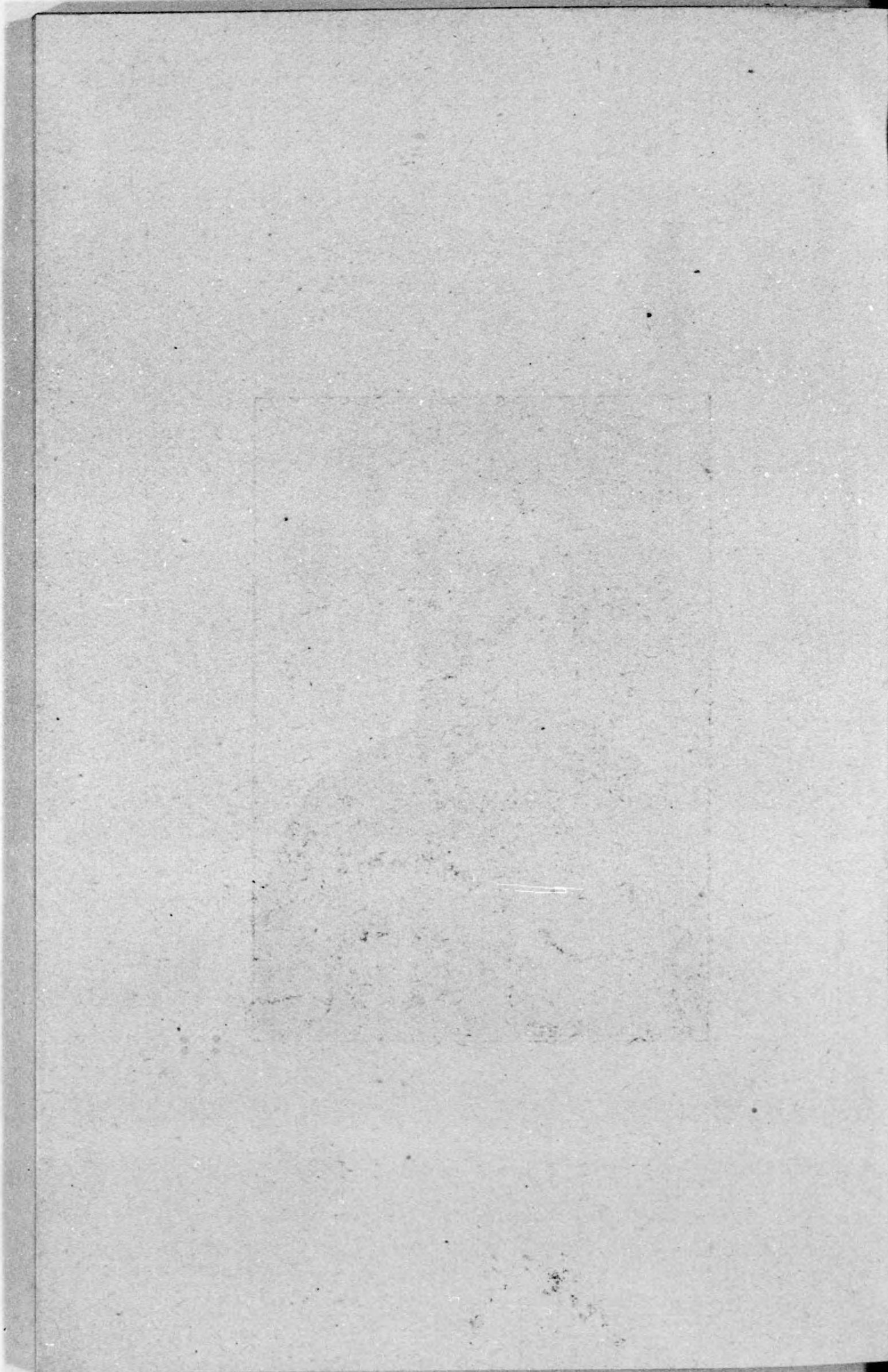
集

近藤豊次郎遺稿

正

8. 11. 10

内交





故近藤豊次郎君略傳

君明治三十一年十二月七日陸奥青森市に生る體軀稍短小なれども
頭腦明敏、熱誠篤實、學を好み文を善くす。大正三年三月青森縣
師範學校附屬小學校を卒へ同四月青森縣師範學校に入る。在學四
年成績常に優秀、傍、同人を糾合して詠草を編輯し以て儔勃の詩
情を吐く。霞村の名漸く縣歌壇に著れ又中央に出づ。大正七年四
月職を青森市新町尋常小學校に奉ず。勳精事に當り、懇切子女を
導く。子女以て欽慕せざるなし。大正八年八月九日不幸病を獲、
同二十九日午後十時二十分溘焉として歿す。享年二十二。等しく
世の憾む所なり。



故 近藤豊次郎君略傳

君明治三十一年十二月七日陸奥青森市に生る體軀稍短小なれども
頭腦明敏、熱誠篤實、學を好み文を善くす。大正三年三月青森縣
師範學校附屬小學校を卒へ同四月青森縣師範學校に入る。在學四
年成績常に優秀、傍、同人を糾合して詠草を編輯し以て齟齬の詩
情を吐く。霞村の名漸く縣歌壇に著れ又中央に出づ。大正七年四
月職を青森市新町尋常小學校に奉ず。勵精事に當り、懇切子女を
導く。子女以て欽慕せざるなし。大正八年八月九日不幸病を獲、
同二十九日午後十時二十分溘焉として歿す。享年二十二。等しく
世の憾む所なり。

夙く朝ゆ擔架の上に身はありぬ
大日しみじみ顔をつゝめり

——入院當夜筆もえ執らで口吟める
を姉君の寫しける君が最期の歌——

小序

あだし野の露消えやらでのみ住み果つる習ひならねど、歌ふべき
望みの秋のさはなるに、こゝたく集ふ愛し教へ子の淋しく立てる
此の世をば、慌しくもよそにして死出の山路に旅立てる君の生涯
のげに儚かりしよ。皇天いかなればまた此の努力の一生を中斷し、
此のうら若き歌人をして思のまゝに歌はしめざる。六させ餘りの
その交りも、いま幻と消えぬと思へば、我が悲しみいさぐ追るも。
哭すれど復歸るなけん君が佛を、せめても偲ばすすがに君が
かたみの詩草のくさぐさ、今はも上梓して同窓故舊に頌たんとす。
あはれ在天の英靈冀ふらくは微衷を饗けよ。

大正八年初秋

市都にて

石川七五三二

題して「霰村集」と謂ふ。故人が雅號に因みて編者の冒せる稱、英靈能く首肯するや否や。

本集歛むる所の遺稿は、主として中央並に縣歌壇の機關雜誌「潮音」「創作」「詩歌」「短歌雜誌」「はまなす」「樹燭」「獨白」「暮笛」等に選載せられたるものとして、其他「文章世界」「校友會雜誌」及び故人自ら編める詠草「秋風」、日記、手帳、友への書信等に據れるもの亦少なからず。就中「秋風」は大正五年作の大部分を占む。

故人の遺稿は本集に盡きたるに非ざれども、紙數に限りあれば餘は暫く之を割愛せり。編者等の不肖或は故人が會心の作を洩せらるなきを保せず。乞ふ之を諒せよ。

終に臨み編輯上多大の勞を累はしたる諸君に深謝す。

目 次

略 傳	小 序
大正五年作	三
大正六年作	四五
大正七年作	七五
大正八年作	一〇三

大正五年作

大 日

大正五年作
大正五年作
大正五年作
大正五年作

硫黄匂ふいでゆに浸り眺めいる冬の夕べ
の空のはるけさ

鳩むれて夕日は赤くかざろひぬ秋川沿の
白壁の家

病みぬれば額に手を當て熱いかにと見給
ふ父母のおはすぞ我に

大いなる息する如き夜の空にはかなき孤
獨の我をさびしむ

病める身をしみじみ床によこたへば冬の
空はろに晴れ渡り居り

我が過去は問ふ事なかれ思ふだに悲しく
も亦はかなかりしを

阿波にゆくてふ順禮の娘こにもものどへば悲
しきまでにはゝるみし哉

まごらかに眠れる乳兒よ汝なが胸の清き情こころ
の永久とこほに消きえざれ

冬の日ひは暗き入江にひろごりて輝く遠とほの
山々の雪

雪ゆききえて春日うらゝかに照る土の色なつ
かしみそと踏みて見る

雪ふみて磯邊を行けば粗朶の上にくらげ
の一つ残りありしも

まぼろしの幼な昔の懐しく乳母が故里た
づね見しかな

歌心抑へかねつも書かみを読む物學ぶ身は悲
しかりけり

亡き父を波のかなたに慕ひつゝ少女をさめは今
日も海邊にたてる

たゞ一つ雪の磯邊に残されしくらげに冬
のいのちさぶしも

アカシヤの並木そよぎて北國の港の町に
夕べ迫るも

濱の眞砂キラと光りて月黄なるはつ夏海
のほの黒きかな

一もこの鉢の木にさへ淋しくも春の影さ
す夕まぐれかな

春眞晝濱べの砂のぬくもりに身を投げ入
れて思出に泣く

病みふして林檎ふくめばほろほろと味覺
悲しき春の夕ぐれ

夕されば堤のかげの草々はかなしきいろ
にふるへてありぬ

黒き犬噛み合ひ居たり落日の坑山町はさ
わがしきかな

鈍色の日はかたむきて浪白き沖より闇は
迫らんとすれ

かなしきは夕べ小雨のを絶え間を冷く光
る横雲のいろ

大暴風過ぎし夕べのさむぞらに微かに響
く汽笛かなしも

高臺に淋しくたてる停車場の窓べに映ゆ
る夕日赤きも

黄昏をポプラ並木のかげにして冷く揺る
ゝ街の灯のいろ

君ならで誰にか告げむ春雨に泣く海棠は
わがこゝろかも

叱られて涙ぐむ瞳に見し街の灯しのかげ
に母を恨みき

満潮みらしほはゆたにたゆたひ橋杭をめぐりてや
ます青き藻の見ゆ

薯の花摘み倦ぐみつゝ見上ぐれば岩木は
青く聳えけるかな

あかつきの木ぬれさやかに光り居り鴉き
たりて啼けば悲しき

雨の前の安からぬ様ふかぶかどカフェー
の隅の花瓶をめぐれる

はつ夏は我が胸いともいたさかな幾とせ
戀ひし少女嫁ぎて

はつ夏を新しき木材の香りして手斧の音
に晝は震ひぬ

海山も夏となれるを羸弱るんじやくの身はせんすべ
もなくてすぎゆく

何もの「か」迫る「心地」の眞晝はも日は赤々と
草もそよがず

ひそやかに我が網膜に影ぞ寄るいとしそ
のきみ名はダリヤかも

相見えて物も得言はぬ悲しさはきみを戀
しと思ふこゝろぞ

風渡る稻田のなかにしほしほと見出でし
百合の赤き一と花

百合一つ埃にまみれ眞夏日の野中の路に
俛れて咲く

路とへば後ろ向きしまゝ答へける村の乙
女は幼かりしも

川ごしの杉の木立に蟬なきて水面きよら
に夏闌けにけり

夏の海明るく晴れてはるばると岬の村の
家並見ゆども

我も共に黙して立ちぬ馬の背の毛並みに
映ゆる赤き入り陽よ

曇り日の眞晝小暗く砂埃街を南に飛べり
行けるも

港町まひる砂邊に日を浴びて若き跛が山
を見て居り

新開の街の並木を白く照る陽色さびしき
夏のまひる間

薄闇を提燈もちて白服の行くがさびしき
夏の暮れがた

やませ吹き雨雲こめし空合の安からぬま
ゝ夕べとなりぬ

連絡船稍に傾き走り居り港は今日も東風
吹くなり

うすづく日夜汐のはてにはの見わて曇り
日の夏の夜となりにけり

麓べに君ぞ在いまますと岩木山落いりひを見つゝ
戀ひやまぬかも

或る時は旅藝人をあこがれつ流離のこゝ
ろ湧きやまぬかも

北越の劔舞の群の少女等に悲しき一人見
出でけるかも

踊り子の群に入らむとする心今や我が胸
に芽ぐみそめしも

いかで我が十年の夏は踊り子の群にも入
らですぎてありけむ

六年ぶりポブラいや高くなりまさり母校
は夏もたけてありにき

夏たけて舊師が家を訪へば芝垣しげり師
はあらずけり

山々の峽間は深く霧こめて小雨となりぬ
夕の停車場 遠虫にて

暮いぐらし近く蝸啼いぐらしきつ立秋の八幡山に立ちて海
見る 淺虫にて

盆踊り幼わかな女めの兒こが鄙唄びやうにわれ泣なきしか
も何のたわけぞ 以下夏休大鰐温泉行の歌

愚なることゝ思へど盆唄に男一人が涙た
るるも

夜となれば唄聲悲し平賀川晝間は虫の音ね
もぞあらくなく

盆踊り彼の俗調に何すれぞわが胸かくも
うちふるふかや

花の家やの若わかき悲かなしき三みつ妓ぢが名聞くともな
しに覺えけるかな

平川の流の岸につゝましく衣きぬ洗あらひ居るを
とめ哀しも

名にし負ふ河鹿聞かむと平川の河原に夜
を立ちし我はも

夜となれば河岸の宿に赤き灯のともりて
高く唄ぞするかな

夕されば清水くむとて河ごえに橋をゆき
の乙女多しも

平川の瀬々の浅みに飲ふと二十の軍馬轡
ならべぬ

行き行けど浅瀬河原の平川やそのみなか
みを涉り行くかも

河鹿きぬ旅の日くれて淋しみの極るは
ての夜の山路に

河ごしの柳茶屋がけ定かには見えねど戀
し君が御姿

夕づく日うすらにほへる平川の川曲ちか
く蜻蛉とぶかも

讀みさしの歌集さしおき川岸に衣洗ひ居
る乙女戀ふるも

櫓火ほたたく平川岸は暮近みくるぐろとして
柳ゆらぐも

河岸の木の下闇にあかあかと櫓火もねつ
ゝ人等どよめり

睦まじく兄と弟が木を積みて迎へ火たく
と笑み居りし哉

あかあかと土藏の壁の照り映えて迎火焚
きつ人らどよめり

門火もゆ月の出前の湯の村や軒場軒場の
門火燃ゆぞも

松杉の木立のなかの鐘樓を後ろに立ちて
月の出を見る

月の出を羽黒の山にゆく私の影のさびし
も路の白しも

石多き湯泉をゆくや朝明のさ霧のなかに
ゆの匂ふかも

おそ夏の山路をわけて頂きの林檎畑に急
ぎけるかな

朝空に浮べる月よ浮き雲の色より淡き光
りならずや

夏の月真白く受けつ山近き里行く汽車の
影の小さけれ

草深き山の小驛に故里のむかしの友と會
ひにけるかも

語るべき折もあらず隣り宿の乙女は今
日し出立つと言ふなり

山川の青きがなかに輝ける温泉の町の夏
のあけぼの

山川の青きがなかにおそ夏の温泉の町の
家並見ゆぞも

岩木野に今日ぞ野火見ゆはるばると暮れ
行く山の麓青しも

夏日さす草山圓くくつきりと濃藍の空に
浮びけるかな

茶臼山城址と見ゆる高臺に夕べの月が出
でにけるかな

杉檜ならびて立てる八幡の麓にひとり月
見るわれは

きりぎしの赤山土にむら黒き雲の陰翳の
見えて悲しも

待つ程に廿日の月の出でにけり黄に照る
影の泣かまほしさよ

夏はやも涼しくなりぬ明暮のこの言何ぞ
淋しいかなや

逢ふ程の乙女戀しくなりまさる男と我は
なれりけるかな

火の山の炎の如き戀人もえ待たで生くる
淋しきわれか

鎮守社の杜の出口の料理屋の二階に立ち
て我を見し娘よ

房子悲しよべの白紛あともなき素顔淋し
く水汲みに行く

村をとめ無智の乙女といふなかれ燃ゆる
燃ゆる赤き胸ぞも

温泉の町の遊び男の子がゆき所外川町は
美しきかな

降るとしもなくて霽れつゝ遠山のうすら
烟れり雨の日の午後

雨の日の午後の書齋にフト思ふ古りし單
衣の襟の冷たさ

みちのくの南の涯の山の奥に故郷の海を
想ひけるかな

津軽野の南の涯の山深く木樵りて生くる
男さびしも

七月の岩木山脈遠く見つ君ふるさとを戀
ひしころはも

おそ夏の深山の小屋に山守が話を聞さつ
寐ねにけるかも

暮近み急げる松の並木路の木梢に星の見
えてけるかな

村一の富隈が家の塀ごしにさびしく立て
る芙蓉花かな

山深き温泉の夏の路ゆきてフト海こひし
くなりけるかな

海戀し山川青き湯の村をゆけば草かほり
海ぞ戀しも

青森の縣廳通りの白晝なごフト思ふ湯の
宿の寐覺に

青森の夏のまひるの大通り白き日傘の乙
女ゆくらむ

晩夏の深山の澤に鐵橋の朱きを見つゝ旅
をおもふも

湯の村や水汲み娘等も思ひ出の哀しき一
つ忘れ難かも

寺の後木立の影にうす黄なるおそ夏の日
のほの洩れてゐる

山靜に鳥も翔らす仄かなる吐息に暮るゝ
出湯のかはたれ

おそ夏の青田のなかの國道のましろに照
るを見つゝ悲しも

夏まひる村のはづれに黒々と烟りを吐け
る烟突のあり

我が若さ敗るまじいぞ岩木峯の落日を見
つゝ思ひけるかな

矮人の子を慰むる友もなくわが若き日の
夏は暮れゆく

夔々どひやく村社の太鼓にも靜かに秋は
忍び寄るらし

鉦なりぬ夏暮れ方の八月の大日堂の入り
陽あかきに

そこそこにみ寺おろがみ旅人のフト我が
前を走りゆけるも

旅すてふ南秋田の若人と連れ立ちゆきし
山路なるかな

津輕野の南の温泉北羽後の乙女も稀に見
えにけるかも

山々の間に長き小平野平野のなかの百戸
の温泉の村

山の古驛都へ歸る學生の群れゐるなべに
風光る見ゆ

新しき山の停車場年若き驛夫の聲に眼醒
めるしかも 石川驛にて

こみどりの光り沈めるみちのくの鷹揚園
の夏の午后の日

眼瞑ぢれば浮び来るかも海川の濃藍のな
かの夏の青森 滞鰯己に二旬に近し

青草の底ゆく心おそ夏の深山の峽を汽車
のゆくかも

汽車のなか護送されゆく若き兵の作り笑
ひの悲しかりしも

温泉の町や夜霧のなかの灯の影に相見し
人を忘れざるべし

路地行けば裾にまつはるほのぬくみ温泉
の町は懐しいかな

垂れ下げしその黒髪を無造作に白き布も
て結び居し娘よ

北海道移民のなかに年若き乙女も交りそ
ろ悲しも 青森驛にて

飴鉢に溺れし蠅の身もがきを壓かずも見
入る心わびしも

雲高く高くとびゆき曉を川べの木々は葉
揺れだにせず

白蓮は悲しき花ぞ古沼の泥にも染まで清
くたゞよふ

いひ様なき吾の笑顔の淋しさを知れど詮
なしいかにせばよき

爽やかに九月初秋となりにけり朝を静か
に白き雨降る

九月てふ其の聲何ぞ清いかなするどき水
と風の光りよ

夏はやも九月となれば色あせし校舎の屋
根の淋し曇り日

とり出せしノートに匂ふ樟腦の初秋の朝
の淡き刺戟よ

名も知らぬ子飼の鳥に蠅とりてやりし心
ぞ哀しいかなや

一月は手にもせざりし教科書をフト本棚
に見たる淋しさ

雨風の荒む夜なればたまさかの彼の娘が
情忘れがたしも

吹く風を袖にさけつゝ提灯の灯を貸して
ける若き乙女よ

衰へゆくわが情熱よ秋風のころともなり
ぬ何とせうぞの

こゝたくも櫻紅葉し落つる日の血の滴り
に似たるたそがれ

校庭の櫻紅葉の下草にしみじみ秋を哀し
むこゝろ

黄落葉の山路出づれば秋晴れのもみちの
山が遠空に見ゆ

秋山の麓を辿り名も知らぬ草摘にゆけば
涙ながるる

うすら寒き俗の眞晝の陽が散れば川下さ
むし白き流木

うす曇る冬の陽に照りみち潮の音もたゝ
ずに流れゆく見ゆ

鷗啼くと眸ひつそり見上ぐれば海は櫓聲
のいや淋しかり

大正六年作

みちのくの磯にわが世の祥雲を仰がんと
する身の安さはも 友への年賀状に

健康のからだと切きにならまほし我が病いつ
きの頃となりぬる

病みづかれ痛むわが睡めにうつうつと青み
て迫る春の磯浪

* *

思ひ出の旅なり我のいとせめて健かやに
此の春をすごさむ 以下修學旅行の歌

故里は雨のさ中に灯がともり吾を待ち迎
ふ老いし父母はも

ひようひようど風がなるなり國境を我が
汽車越ゆる雨の夜更けに

麓には温泉の村あり桃の花四月の雨に濡
れて咲けるも

雨の中電車の鈴のひたなりて侘しいかも
よ灯は明らけく

大谷川流れともしみ陽の白き河原に立て
ど水の音もせず

利根の水月の下びを氷るがに流れて居る
なり春も深むに

春の月はのかに照れば利根の川河原の石
が濡れて光れる

輕井澤の驛は目ざめの我がまみにさむざ
むとしてうつり出にけり

朝寒き空に動かぬ山の雲あれが淺間の煙
ならしも

めざめつゝ未だおちるぬ汽車の窓に淺間
を見たり遠きあさまを

めざめつゝ窓をあくれば曉の風寒々し淺
間いま見ゆ

唯ひとり汽車の窓べに顔よせて淺間を見
れば寂しさあまる

沓掛に夜は明け白み淺間山ほのかに烟吐
くが見ゆるも

淺間山烟くろぐる止りてあかとき寒く聳
ね居にけり

みすゞかる信濃に來り今ははや淺間を見
れば心足るべく

山ざくらましろに亂れ朝まだき小諸の里
に烟なびけり

小諸々々小諸の古城見まほしくまかげし
見れどはるかなりけり

こゝははや美濃と信濃の國境雨蕭條と降
り出でにけり

春深く木曾に分け入る我が汽車の窓をし
めして雨降り出でぬ

木曾川の流れて今は音もなし雨に濡れつ
ゝ我が汽車はしる

岩つゝじ咲けば咲くとして故里の五月の山
の思ほゆるかな

春たけし木曾の谿間の岩つゝじ眞赤き花
が濡れて居たるも

こゝに咲く岩根のつゝじ遠々き故里の山
しのばゆるかも

みすゝかる春の信濃路旅に居て親を思へ
ば寂しこゝろは

木曾川添だんだん島にそばぬれて白壁の
家のつばらなるかも

松原の木の間ゆ見ゆる棚作り梨の花今盛
り過ぎたり

三井の寺五月真赤き陽の照りて狂女さゞ
めき居たりけるかも

夏淺み京は三條繪本屋の少女も今は夏着
しぬらむ

これやこの故里遠き西京の夜のさまよひ
に見たるともしび

さむざむと五月の雨のふる中を思ひ残し
て去るなり京を

大坂の古城のほとり夏草の花咲き盛りさ
びしき真晝

風荒き舞子長濱ゆき疲れほのぼのぬくさ
足裏なるかも

東海道驛の宿はも燃わさかり夜の窓べに
見らく悲しも

横濱の支那人町の青柳ふかぶか揺るる曇
り日なりし

故里に歸り來れば陽は白くあらしの中に
濁りたりけり

* *
春芝居士間に坐りてつゝましく涙ながし
て居たる人妻

哀しきは眼鏡ごしなる汝が瞳の輕き笑ま
ひの今も目に見ゆ 亡友を悼む歌

夏まひる青葉の中ゆ黒々と烟りを吐ける
烟突のあり

眞夏の陽ちゞの音して照り強み渚に青し
晝のさゞなみ

呼ばはれて教師てふ名に生くるべく日に
げに吾を思ひ傷むる

はまなすの花を手折りし教へ子をさとし
てかへす夕焼の窓

ひつそりと夕べしづもり女の童遊動圓木
によねんなきかも

傾く日遊動圓木にかぎろひつ少女ほのか
に身をひるがへす

裏藪に雨の打つ音うら哀し夜深み起きて
教案書くも

だんだんの畠につらなる雲の峯見つゝし

いゆく旅の朝明け 以下夏休西海岸紀行の歌

朝の雨そゝぎしづもる木立なかかぐるき

鶏トリはとさか振り居り

大股に鶏トリ等歩みて餌あさり居り雨にしづ
もる林のあした

いどけなき故里人と友はなり吾に與へし
つぶらの薺 孤歩君の宅にて

莓の實つぶらに赤き莓の實雨にぬれつゝ
貪り食むも

莓の實たづねたづねて村遠きこの野に立
てば繁き雨はも

津輕野の落日を見まく出でゝ來し吾にし
たじも二人の友は

日は沈み遠野の木立さびしければ語りし
友も口をつぐみぬ

思ひ見る津輕平野の落日を一時にして
見んと思へや

津輕野に落日は今かもえにたれ物言ふ友
が顔の輝き

友二人しきりに語りうつゝなしうつろの
胸に陽を仰ぎたり

故里は秋もほのけくかすみつゝさ青き岩
ぎたりしを

赤松の疎林にあはれ草しきて甲田を望む
甲田の低き

木の間なる山の低さよ故里のあなこは淋
し八甲田山

十三の土堤どてに汐風荒れにけり草うら枯れ
てなびき伏しけり

うら枯れし花はもなびき風を荒み十三の
浪は蛇へびに似るかも

むらがりてかぐろき蝶の身をめぐる夏草
の野に我が物思ひ

か黒蝶こった亂れて身をめぐる十三潟の
土堤の一と時

獨りなれば身は寂しさの満ちわたる悲し
き旅になごて出でけむ

しかはあれ西の港の衰へし海の色こそ尋
めて來にしか

陰翳暗き西の港のさびしさにあこがれ來
つる心なりしを

あなはるか眞夏低山故里の八甲山に雲の
峯見ゆ

さみしらに月照り渡りこほろぎのはつは
つ啼きて悲し墓原

月讀の月の下びを啼きしきる虫にこころ
の亂れざらめや

瞭として月の下びの我が姿まさやかなれ
や心いたまし

望の月松の葉越に照れる見ゆあな松の月
見えのさみしさ

居つ立ちつおどろに馬も騒ぐらし月さや
照れるこの草原に

草なかに月はも冴ゆれ騒ぎ立つ馬の足音
のひとく夜頃を

影亂る月の下びの草なかに馬もこゝろの
狂ひ出でけむ

うつし世の悩みはしげし墓原を行きつ戻
りつこの望月夜

墓原に佛まつれごうつし世のなやみしげ
かり豊安からむ

* *

片岡の松の木原ぞはつはつに出水の中に
残りたるかな

あからひく晝の野末を濁り水光り流れて
はるかなるかも

はるばるし秋を出水の流らふる野に一と
もとの松の樹は見ゆ

松林土手につゞきて青めるが出水の中に
見えて寂しき

裏畑の出水の中に佇みてさむけく仰ぐ天
の河かも

裏畑の出水が引けば白けたる草生のなか
になけるこほろぎ

大川の秋の出水のさ夜くだちほのかに出
でし月の明るさ

大川の出水を守るともしびの歌々として
今宵の寒さ

ひもすがら暴風雨吹き荒れ吹きつのりけ
ざやかに秋はたけにけるかな

硝子窓雨に萎れて花萩の映りて見ゆれ秋
のさびしさ

窓越しに秋萩の花は揺られ居り雨に萎れ
て姿さぶしも

ひもすがら日照りはげしき庭土に萩の一
と枝は散りてさびしく

桐畠桐の葉は落ちしんとして人はもだせ
り夕日の中に

朝戸出の風の涼しさアカシヤの疎ら梢に
日は早や高し

降りがての雲散り失せて秋晴れし風の涼
しさ木の葉はそよぎ

あしびきの山の麓の村を戀ひ行けばした
しき枯葉の匂ひ

晝^た開けて行けば村路のなつかしさ秋はわ
けても枯葉の匂ひ

潮風に藻焼く烟もまじり来て空はがらか
や秋の川口

川口の浪ぞ濃^こ藍^{あか}に眞輝き風のまにまに藻
を焼く匂ひ

妙見の落葉櫻の下に居りかなしきことを
思ひゐたりし

下草のうすきもみちに坐りつゝ身の冷た
さに心おどろく

峽がの路出で、仰げばかゝやかに空埋める
し紅葉なりしか

秋山の落葉ふみゆきゆくなべに空にかゝ
よふ遠山もみぢ

遠山は紅葉かゝよひ峽の家つばらつばら
に見ればさぶしも

草もみち陽には照り映え朝露のいまだき
路に仰ぐ秋空

野に沿へる場末の町に秋深く入日のすれ
ばこころ和なごめり

たまさかの暇を持てば町に行く町の家並
に日は斜なり

天の川涼しと仰ぎ貧しかる身をばなげき
ぬこの夏姿

萩の花ゆらぐ淋しさ秋風は高照る眞陽の
下に吹きたれ

今日ひと日暴風雨吹き荒れ雨の中淋しき
樹々の姿なるかな

大川の出水守るらん篝火の煌々として今
宵さむしも

大正七年作

冬山の麓の家に赤き灯の涙ぐましく見ね
初めしころ

かにかくに別れし後はうら淋しまみ睡麗しき
君なりしかな

笹叢の枯葉がくれにせゝらぎて真冬の川
のあはれなるかも

冬川の岸の小笹の揺れつよみ吹く夕かせ
は雪交へたり

川添の笹の葉の雪しばしばも風は渡れど
落ちんともせず

菩提寺の杉の並木を吹く風の今は雪さへ
亂れて居らん

菩提寺の杉に嵐の吹くところ眠りてあら
んかなし御魂は

停車場の柵に凭れて今日も亦奥羽上りの
汽車を見しかな

まなかひに見えてま寂し向つ岬ミサキかの半島
に友ぞ病むてふ

冬霞遠つ岬をこめて居りそこに我が友病
むといふかも

下北の遠つ岬を見てかなし我が柵村は病
みて居るてふ

枯笹の枯葉そよげば夕寒み岸べを雪の散
りいそぐ見ゆ

夕風に葉うら揺れ居り笹の雪さらさら散
りて寂しきものを

枯笹の葉うらを迂る雪の音さやかにひと
く朝明あさけなるかも

月清み松の根もとに白雪を掬ひて滂す君
を待つとて

涙また止めかねつもさみしらに仰ぐ夜空
は風の吹く音

しかすがにきぞの夜の音重ければ庭樹の
枝の折れにけるかも

つゝましく雲の山べにこもり居て今はし
みじみ人戀ひまさる

雪曇り夜空を暗く垂れ込めて折々聞ゆ鐵
を打つ音

枯笹の枯葉揺れ居り一すぢの眞冬の川の
あはれなるかも

冬川の岸の小笹の揺れ強みさらさら雪の
散りて来るかも

流れ入る月の光のほのけさに厨の水も凍
りゐにけり

厨べに月の光をほの見つゝ望は近しと思
ひけるかも

眞晝なす月の光の明るさに身は寂しくて
歩みとゞめし

学校の門を出で来て見さくるや夕月低し

枯木枯原

浅宵となりにけらしもわが行手雪ほのば
のと暮れそめにけり

病ひもちて雪野の原を立ちかへる友の姿
の寂しくて泣かゆ 終村兄に

雪野原い行きさぐみてうつそみの病ひ癒
わねと歎きたらすや

排雪車雪の晴れまを走りつゝこの停車
場ざわめき立ちぬ

うららけし雪の晴れ間を排雪の機關車走
る音も静かに

うなだれて磯の白雪手握りつまさきくあ
れと友を祈るも

みちのくの二月の海に帆をあげていづち
に行くか舟の遠見ゆ

つつましき夕べなるかもうら若きをみな
と逢ひて路譲りけり

おしなべて津輕山脈やまなみ映やまなみわたり我が世の
首途かど雄々しきかもよ 卒業の歌

貧しくて洋服を買ふ術もなき我が卒業の
春の寂しさ

さなりさなり身の貧しさは堪へて行かむ
二人の親に盡すと思へば

老いの身の生きながらへて子が幸の今日
にし逢ふと母は云はずや

學び舎の窓にいよりてはるばるこ眞澄の
空を見入りたりけり

わが學び今日は終へつも見はるかす梵珠
山脈夕明りせり

うなだれていく時街を歩みけむ夜更けて
残る遠きともしび

宵早く蛇の目の傘をさしながら遊びに來
しと子は笑みて云ふ

この雨によくぞよくぞと教へ子の衣の裾
を乾してやりけり

教へ子の少女の群を歸すとして提灯ともす
その提灯の

雨あらしいつか和みてゐしならむ軒端の
雫夜更けて聞ゆ

カアテンを引けば外面のさよ嵐雲脚はや
き月夜となれり

校庭の櫻はややに咲き初めぬ鬼遊びなど
せむといふかや

教へ子のさそふ遊びを退^{しりぞ}けて頻き咳き入
るも吾は苦しく

雨嵐はげしけれども教へ子の笑ひの聲は
部屋に溢れつ

雨ふりて訪ふ人のなき宿直夜を青葉はさ
やぐその雨の中

カアテンを引きてを見れば久方の雲間を
洩るる月はありけり

校庭の櫻はややに咲き初めぬ鬼遊びなど
せずや教へ子

櫻咲く春みちのくの温泉村訪ね來し我が
姿はさぶし

温泉山櫻咲き咲く日の晝を教へ子率かにつ
登りけるかも

あかあかと夕日の野邊に何の葉か太葉ふとば静
かに揺れて居にけり

くれ近き驛のかたへの青き葉は夕山風に
吹かれたる見ゆ

あからひく晝の街路の中にしてひそまり
深しこれの青葉は

夏近し教員室の窓にゐて青みゆく樹々を
かなしみにけり

橋こえて低き家並のはつはつに地平の外
に見ゆる曇り日

別れ居て三月に近し山里の若き教師と汝なれ
もなりけむ

忍従のたふときことを知り初めし我が心
今は怒る事なし

さみだるる静かに脊戸の樹のもろ葉もろ
葉は揺れて居にけり

真晝街行き窮りし家陰ゆ吹きくる風は海
のかせかも

山の雲遠く晴れつつ爽かに風吹き生れし
真晝なりけり

輝きて裏葉裏葉のそよぎ立つ木々の梢の
風に向へり

海こえて斗南となんの山に落つる日の傾くかげ
は秋の色かも

襲々と腹に泌み來ち大太鼓倭武多わぶた太鼓の
腹にしみ來も

日の光り波なみのそこひに照りよごむこの沖
つべに舟は來にけり 以下淺虫にて

湯の島の荒磯の岩の影にゐて遙かにぞ見
し雲の峰かな

水底の石のゆらぎも明らけく澄みとほり
たる真晝なるかも

漕ぎ出でてかへりみすれば秋近き故里の
空に雲の峰見ゆ

おごろきて沖つ船べゆこてかざし故里の
山の雲の峰見る

岨岩さばいはの陰に乗りすてふと見たる真夏の白
雲淋しかりけり

波静か淺虫の海に夕日照り夕日に向ひ漕
ぐ舟も見ゆ

夕ぐれて青き磯回いそわをおしつつむ島山はや
も黒みそめたり

夕ぐれて水脈みづさやさやに光り居り磯べを
さして歸る舟見ゆ

この夜の月の光に遠つ岬烟れる見れば秋
も近かり

秋の日の黄なる草山駒込の谷間に鳥の聲
が聞ゆる

秋の日のうすき曇りを仰ぎつつ山路は淋
し一人はゆくに

秋山の正午の日を背にうちつれて物語り
つつ歩む教へ子

病める子はハモニカを吹き夜に入りぬ蜀
黍畑の黄なる月の出

夏草の茂みの中をはるばると遠くつとけ
り白き電柱

ややしばし汽車は青葉の中を行きとどろ
とどろと音こもるなり

汽車走るここの山峽夏草の茂みの中にこ
もる音かも

夕風ぎて青き入江をかくみ立つ鳥山はや
も動きそめたり

帆をかけて出づる入江の浪の色鮮かにし
て白晝なりけり

この夜らの月の光りに遠つ岬さきけぶれる見
れば秋も淺かり

うちよりに我に物言ふおもざしのあな輝
かに笑みてのたりし子等に

駒込の桔梗が原を吹く風にさやさやさや
ぐ山の草はも

うちなびき山の草鳴る秋風の小松が原を
獨り行くなり

麓への遠き廣野にうち集ひあえかに遊ぶ
をとめなるかも

茜さす東の空ゆ渡り來るあらしの中に妹
が死をさけり

思はざりき若き命のほろびゆくこの朝空
の茜雲あはれ

秋山の麓廣原小松生ふる枯芝原にいねて
あそべり

秋淺き麓草原松かげに風の音きけば寂し
きものかも

小松生ふる秋の山べに風の音ききつつ居
れば亡き妹しのばゆ

亡き妹の聲かと聞ゆさうさうと松ふく風
の音の寂しさ

聲あげて高く歌へる事もなく死にてゆき
たる妹あはれ

十四年その生涯に一と時も聲高く歌ふ事
はなかりき

時として愚者ぞと罵りしそのをどめはも
今は亡きかも

教へ子の少女のかげのまさひしくうつり
て動くここの草山

まざまざと在りしその日の面影の眼には
浮び來寒き寐覺に 亡き恩師廣田先生に

めは冴わてさ夜はねらねすうつつにも師
がみ面の衰が見ゆ

師が聲は松吹く風の音にもかも似たりと
いはむ今に思へば

* *

傾きし夕日に見えてくろぐろと寒き潮^{うしほ}は
流れたるかも

太正八年作

歸る日を指に數へてこの朝明^ひ遠山の雪を
仰ぎけるかも

山こえて雪野の原をゆきゆかば父母が安
居の故里も見む

夕深む青森驛を後にして吹雪に向ひ汽車
出でにけり

夜を深み山の小驛に火をふれる驛夫のめ
ぐり舞ひ散らふ雪

ほの黒く山に並み立つ杉群の月に寂しく
見え渡るかな

久にして宿直の夜となりにけり街のとも
しはかがやかに見ゆ

我が歩む草履の音の寂しさよ夜の廊下の
冷え渡りつつ

雪深くつもりて幾日この街は輝きわたる
陽の色も見ず

山を越え里野をこえてこの夕べ遙かにと
よむ木枯の音

曉となりてを晴れししぐれ雨わづかに庭
に水溜りたり

庭漑さむざむと光り東ひんかしの山の端はいま白
み初めたり

しぐれ雨晴れて久しもかたよりて雨もつ
雲は西にありけり

うららかさ庇の雪をかすめつつ朝の光り
の流れ入るかも

冬風ぎのここの入江に居る船の烟たなび
きて曇る朝空

朝戸出の脊戸の邊遠き駿道冬霞みつつ今
朝を晴るるか

冬山の青き山ひだはつはつに輝く雪の中
に著しも

黒々と入江島山雪ぐもり浪もよらねばう
ら寂しかも

窓に見る遠つ山脈はやもかも雪輝くに寂
しまれけり

灯をあげて驛の名を呼ぶ聲だにも定かに
わかず大吹雪せり

夕月に烟りて淡し外ヶ濱長き磯回は浪も
立たぬかも

月よみの光りほのけみこの濱に寄せ引く
波は音もせぬかも

窓下の街の灯火赤々と今宵はわきてなつ
かしく見ゆ

雪深くしづもり渡る真夜中の衢の上に月
はほのけし

ほのかにも夜明けぬらし常盤木の茂みの
隙は明るみて來ぬ

わだつみの荒波なして渡り來る暴風のど
よみ聞きにけるかも

いたつきの癒わて嬉しとこの朝のながほ
ほ笑みは美しきかも

むさ苦しき家に行かむが味氣なき自炊の
暮しつづけんものか

以下自炊生活の歌

味氣なき一人暮しの三月へていよいよ苦
し今は歸らな

家を離れ三月は經たり寂しさに父母に今は罪をわぶるも

三ヶ月自炊にあきて家に歸る我的心はいつはりならず

負惜みすれども詮なく噤みつゝ今はしも家に歸るべきなり

父母にそむきてこゝに暮しける三月の月日長かりしかも

夜を深み爪噛みて居り一人居の味氣なき身をしみじみ思ふ

一人居の味氣なき日を重ねつゝ歸らんとする我が心かも

寂しさに堪へてはあれや獨り居て味氣なき日を送らんものか

父母の心にそむき唯一人借家住居の月はつるかも

衰へ行く吾の此の日を寂しみて行けば山
路に櫻匂へり 以下六月十九日山に遊びて詠める歌

山櫻爛漫と春を匂ひけり我が心ばかり悵
せきものか

荒み行く我が心はも山に来て草を見ぬゆ
ゑ樹々を見ぬゆる

荒れ果てし吾の心もいつ知らず和みてを
居り山は愛しき

名も知らぬ潤葉ひろはひろのはの立ち並ぶ山里を
歩み心和めり

淋しさは潮にも似たれ中野なる青葉の山
に一人來りぬ

中野なる山の青葉の樹の影に汗をふきつ
ゝ淋しさ湧くも

自づから汗あえにけり青葉深き中野の山
に深く入り來し

山深く瀧見に行きし教へ子の歸りをまら
て樹の影に居り

樹の影に子等を待ちつつ現うつなし時計はは
やも二時をすぎぬる

桃の花雨に濡れ立ちて寂しかりしそのか
みの旅を思ふ頃かな

櫻散り桃梨すもも匂ふてふ旅を思へば堪
へがてぬかも

提灯のつらなり遠しほのかにも戦勝の氣
分起りけるかな 七月一日の日記より

大正八年十一月一日印刷
大正八年十一月一日發行



(非賣品)

編輯
代表者

東京高等師範學校內

石川 七五三二

發行者

東京市神田區南神保町十二番地

奧野 隆三

發行所

東京市神田區南神保町十二番地

奧野 書店

印刷所

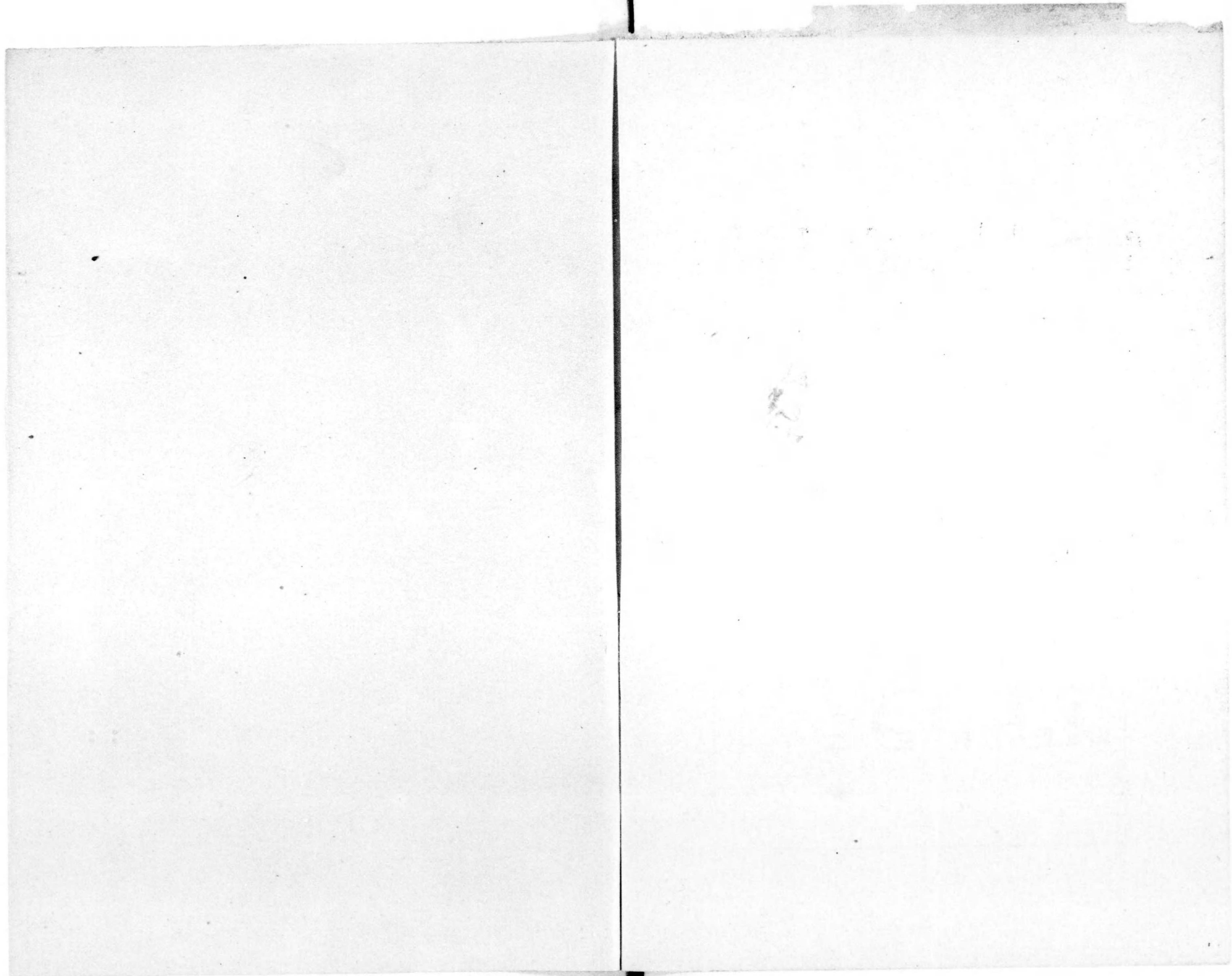
東京市神田區東紺屋町四十七番地

永文社

印刷者

東京市神田區東紺屋町四十七番地

廣瀬 大三郎



251
250

終